法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-14

夕顔の作者について

佐藤, 雄二 / SATO, Yuji

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
44
(終了ページ / End Page)
48
(発行年 / Year)
1959-08-16
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018976

ら永い年月を愛しあった。その恋愛はあくまでも相互的でそして又二人の闘いでもあった。あの小説は青少年向きの文学などといわれるかもしれない。又中村光夫のいう様に「職業化した近代リアリズムの手法」でえがかれているため「二度目に読んだ時は最初ほど面白く」はないかもしれぬ。しかし現代に生きる青年なら、あのジャックとジェンニーの恋愛には深い感動を受けるはずである。それに比べて「暗夜行路」を読んで「幾年ぶりでほんとうの恋愛小説に出あったろう」（小林秀雄）と謙作と直子の恋愛に誰が感動するであろうか。私の知ってる範囲の青年たちは誰もそうは云わなかった。

ジャックとジェンニーの恋愛はフランス文学の生んだ恋愛であり積極的に社会とたたかって生きた人間の恋愛であるが、ひるがえって我が国の小説を考えてみれば、「それから」の代助と三千代の恋、つまり父と兄の経済力のバックの下に無為な生活を送る代助のあの様な非社会的な生き方も、明治の社会のゆがみを悲しいほど知りつくした知識人の消極的ながら社会を意識した姿である事は衆知のことである。謙作の無為な生活態度と、同じ様に無為な生活ではあっても根本的に異っている。だから代助は三千代との恋愛によって自己の生活を破滅にまで導くのである。

作者は「小林秀雄君と河上徹太郎君が『暗夜行路』を恋愛小説だといった事は私には思いがけなかった。然しそういう見方も出来るという事は此の小説の幅であるから、そのいみで嬉しく思った」（続創作余談）と述べているが私にはどう「幅」をもたせても、此の小説が傑れた恋愛小説とは考えられないのである。

（一九五八年本学日本文学科卒）

夕顔の作者について

佐藤雄二

源氏は、目にふれ、耳にとまる、興味のあるものは、すべてとりこんで内在化してしまう人間である。五条の「らうがはしき大路」に、あやしく咲いた夕顔の花に、源氏は、ふと心をひかれるのであった。

「切懸だつものに、いと青やかなるかづらの、心地よげにはひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり、ゑみの眉開けたる」あやしく咲いた夕顔の花。すだれを透してみえる女たち。「誰とか知らむ」と思う。誰か知らぬが、女が、香をたきしめた扇に歌をかきつけて、花にかこつけて源氏に贈ったということもある。「にくしとこそ思ひたれな」と、扇をよこした住人を知りたいと思った

源氏は惟光の心のうちをみつけていう。しかし、その惟光は、「すき給はざらむも情なく、さうぐしかるべしかし」と源氏の行為を肯定するのである。源氏の、見たい、知りたいという欲求は、空蟬との出会い、夕顔との出会いを、源氏のなかにおいて、必然的な行為の動機と転じてしまう。源氏と彼女らの出会いは偶然であるにはちがいないが、それが内在化され、必然化されるところから筋は発展し、物語が成立してくる。それればかりではない。惟光が源氏の欲求を肯定したようなことは、光源氏というひとりの人間の像を成立させるひとつの重要な条件になっている。

「大方に、うち見たてまつる人だに、心しめたてまつらぬはなし」という、そのような源氏なのである。宿命的なともいいうるこの源氏の、見たい、知りたいという心のうちは、惟光によって男からみとめられ、ここでは女たちからみとめられる。

「まして、さりぬべきついでにの御言葉も、なつかしき御気色を見たてまつる人の、少し、物の心思ひ知るは、いかゞは、おろかに、おもひ聞えん」むしろ源氏は、女たちのあこがれの的だった。唯ひとり、空蟬だけは源氏の求愛を拒絶しているが、その拒絶のうちがわにこもる、もんもんとした空蟬の情は、むしろ悲惨であって、源氏を想うほどにもつよく拒絶せねばならぬという自己矛盾の、うずまく葛藤にいろどられている。空蟬のこの煩悶からいえば、源氏の心はむしろ単純だともいいうるであろう。空蟬のこの自己矛盾は、彼女のなかにおいて絶対化されることなしに彼女は伊予に下ってしまう。空蟬は、やはりあくまで理知的な女であり、その理知は自分を相対的に自覚することしか出来ないのである。「際は際」と彼女はいうが、「際」をうちやぶって奔流しようとする情熱はおさえられ、このまま源氏に忘れられるのもおもしろくない、というような自己操作を行いうる女である。しかし、それにもかかわらず、女としては源氏へ心をよせざるをえないという、源氏の存在は、彼女にとっても例外ではない。夕顔の巻にはいるきっかけのため、空蟬についてもうすこしいうと、空蟬の状況は、空蟬によって客観的に自覚されているのであって、「際は際」ということは、彼女の状況を状況としてしっかりと自覚している、それ故の拒絶という表現である。源氏には、その空蟬の状況が理解出来ない。「その際々を、まだ思ひ知らぬ初事ぞや」（帚木）。情事の技巧ということもあろう。しかしそれは、空蟬にとって、決定的な状況なのである。「ありしながらの我身ならば」と、思わずにはいられない、自覚された、どうにもうちやぶることの出来ない状況である。その状況をうちやぶる唯ひとつの方法は、源氏の愛を絶対化して、源氏に応えて行くということであるが、彼女の相対的な、客観的な認識はそれをじゃまする。その状況をうちやぶる行為は、むしろ源氏の方から期待されるものである。しかし、そのような状況を「まだ思ひ知らぬ」源氏にとって、空蟬の、客観的な状況をふまえた拒絶をおしかえすだけのものはなかった。惟光がいうような、「すき給はざらむも、情なく、さうぐしかるべしかし」という人々の支持を、空蟬は、状況の客観化でもって封じてしまうからである。源氏へのあこがれは、空蟬においても例外ではないが、それは、空蟬の自己操作によってたくみに状況の下にかくされてしまう。

しかしいま、われわれは、空蟬の状況から夕顔の状況へつれこまれる。「この程の事、くだぐしければ、例のもらしつ」と、作者は、突然変化めく世界へうつって行くのである。このように、わざ

わざとわらねばならないということは、夕顔の状況の設定に飛躍があり、観念的な操作があることを示していはしないだろうか。変化めく、この世のものとは思えない世界、しかもそのなかでは、昔物語にあるようなことが起るのである。それは、物語のなかに更にもう一つの虚構を設定するということである。いやむしろ、源氏物語のなかの、「かくろへごと」の巻、更にその中の変化めく世界という、三重の構造をもっているといっていい。そしてこのような設定は、はっきりと、空蟬の状況を意識しているといっていいだろう。空蟬の自己矛盾的な状況を追求して来た作者は、ここで更に虚構を作ることで、そのような状況からのがれているといっていいだろう。

「人のけはひ、いと、浅ましくやはらかに、おほどきて、物深きかたはおくれて、ひたぶるに、若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず」、「世になく、かたはなることなりとも、ひたぶるに従ふ心は、いとあはれげなる人」このような夕顔であった。「ひたぶるに従ふ心」をもった夕顔は、源氏にとってこのうえなく愛らしい。ここにみられる愛情は、「ひたぶるに従ふ心」があってこそ成立つものであった。雨夜の品定めにおける結論は、実体としてここで実現される。空蟬の自己矛盾的な状況をこえた設定のなかでしかそれは実現出来ないものだったのである。夕顔は、「ひたぶるに従ふ心」をもって源氏の要求に一致して行く、いわば、作者の観念的な所産であり、抽象化された女性といっていいだろう。

しかも、このようにふかい愛情をとりかわした源氏と夕顔——、そのような愛情にふさわしい夕顔の性格は、常に源氏を通して描かれている。ここには、手法としての客観描写はない。作者はぴったりと源氏に密着し、源氏の眼と行為によってかきすすんでいる。もちろんこのような性格描写における源氏を通したとらえ方というのは、夕顔の巻のみに特有なものではない。しかし、空蟬の自己矛盾的な状況をかかねばならなかったような状況は、ここにはない。最初にのべた、偶然なものの内在化・必然化は、当然、源氏を通して女の性格を描くというこの手法と、はなれがたくつながっているが、作者が源氏の心を生きることによってそれは定着されるのである。と同じように、夕顔のような抽象化された観念的人間の形象は、この変化めく世界のなかに、純粋化されてかたちずくられているために、常に源氏を通すことによって実体として確認されねばならないことになる。作者は、ひたすら源氏を通して夕顔を形象する。だから「心ながらも、すこし、うつろふ事あらむこそ、あはれなるべけれ」と源氏が思うのは、夕顔への愛情のふかさを、源氏の心の本来的な性格を逆にとって表現するということになる。そして源氏が愛らしいと思っている夕顔は、具体的な形象となるのである。

このような、観念的所産である愛情の成立は、昔物語にあったような、変化めく世界のなかにおいてあるものであった。「昔ありけん、物の変化めきて」と女が思うことは、「昔ありけん」ということで、源氏と夕顔の関係が、実は現実とは区別されるということを、自らあらわしている。そしてまた、ここにある源氏と夕顔の心理的なくいちがいは、空蟬における自己矛盾的な状況と源氏の関係や、末摘花の実際と源氏の追うイメージのくいちがいを頭中将や大輔の命婦を媒介として展開する手法とおなじである。階層のちがいをかくしてしまい、そこに愛情を成立させることで、この手法は、

夕顔の巻において内在化されているといえる。このような物語展開の弁証法は、作者が源氏に密着し、夕顔の性格が「ひたぶるに従ふ心」として形象化される結果、そこに対立的要素がなくなって二人のむすびつきが抽象的なものとなってしまわないようにしているといえる。

また、夕顔の「細やかに、たを〳〵とし」た姿と二人の情愛のふかさは、生活の苦しさを語る賤の男の声、おどろおどろしくなる唐臼の音、砧の音、空とぶ雁の声と対照的に、あざやかに浮き出されている。変化めく虚構の世界では、宮廷貴族が忘れてしまっていた五条辺のすさんだ情景と民衆という、むしろ異常な要素をふくんでいることで二人の情愛を描きだす。

しかし夕顔は死んだ。あやしげな女が、源氏の夢のなかにあらわれてうらみ言をいい、夕顔を起そうとする。おどろきさわぐ源氏のために、夕顔は「われかの気色」になり、消えいるように死んで行く。もとはといえば源氏の罪だ。「あやしの心や。六条あたりにもいかに思ひ乱れ給ふらん。うらみられんに、苦しうことわりなり」と思ったことが、ついあやしげな女の幻をよんだのである。しかも、ようやく灯をとりよせて夕顔を介抱しようとしたとき、夢にみえた女がふたたび夕顔の枕上にたつのである。「昔物語などにこそ、かかる事は聞け」と源氏は思う。まこと、このような事件は、異常なことだった。しかし、なぜここでわざ〳〵昔物語の例をもちだすのか。このように、夕顔と源氏のむすびあった世界が、昔物語と密接な関係をもっていることに注目したい。つまり、現実と区別しようとする作者の意識が、昔物語的な虚構をつくる、前にのべた三重の構造、――この作者の構想の論理が問題なのである。

「命をかけて、何の契りに、かかる目をみつらむ」源氏のなげきと悲しみは大きかった。しかし源氏のこの悲しみは、「御帳の内に入り給ひて、胸をおさへて思ふに、いといみじければ、などて乗りそひて行かざりつらん。いき返りたらん時、いかなる心地せん。見すてて行きあかれにけれと、つらくや思はんと、心惑ひの中にも、おもほすに、御胸、せきあぐる心地し給ふ」と、二条院にかえってから、はじめて痛烈に感じられる、反省的なげきであり悲しみであった。人目をしのんだ恋ということも、かなしみとなげきを、内省的・反省的にさせるのではあろう。しかし、ここで、この源氏のなげきとかなしみは、それ自体として追求されず、源氏における悲劇は中絶される。「かかる道の空にて、はふれぬべきにやあらん。さらに、え行きつくまじき心地なんする」という悲劇的な源氏の姿は、二条院に臥して、更に回復することによって、別の世界のもの、夢のような世界のものとなるのである。夕顔に関しても同じである。それは唯、よみがえらぬ世界なのである。「我にもあらず、あらぬ世界に返りたるやうに、しばしは、おぼえ給ふ」この我にもない我――普通の我にかえることによって源氏には、夕顔の一件は反省的なおもいとしてのこるのである。

見たい、知りたいという心から、偶然が必然に、内在的なものに転化されるということを最初にのべたが、しかし、源氏には、その必然化されたもの、内在化されたものが、けっして絶対的なものにつきあげられるということはないのである。源氏の行為の多様性、しかもそれが同時にちがった女に対してむけられているという現象も、このような、源氏のもつ相対的な内在化ということから来ている。作者の源氏への密着ということをみるとき、空蟬の自己矛盾的

な状況をぬけでるために虚構した変化めく世界において、作者は源氏と密着することで夕顔の性格を創りだしたといえる。空蟬が、どうしてもぬけだして源氏にこたえることが出来ない状況にあったとき、むしろ作者は、空蟬と共に息ずいていた。しかし、源氏と共に息ずくことで夕顔の性格をつくり、愛情を成立させたのであった。源氏のうち側から夕顔を形象することによって、作者は、ひとつの実験をしたといえる。「はかなびたるこそ、女はらうたけれ。かしこく、人に靡かぬ、いと、心づきなきわざなり」と源氏は右近と共に夕顔を回想するが「はかなびたるこそ、女はらうたけれ」というその女——夕顔は、しかし、ただ一回の実験として完結せねばならぬのである。源氏は、そのとき、夕顔と共に完結的に生きようとする、夕顔との愛情の絶対化をすることがない。この源氏が現実にかえったとき、その変化めく世界の状況を再び生きることは出来ない。源氏のなかに内在化され、必然化されるものが、絶対化されることなしには源氏の悲劇は起りえない。いま、源氏における絶対は藤壺にある。それ以外の関係は、すべて相対的であるともいいうるであろう。夕顔においても例外ではなかった。しかも、夕顔を愛することで源氏は夕顔を死なせたのだった。この源氏の大きな過ちは、「かくろへごと」のなかの、しかも変化めく世界での事件として、源氏の青春の、ひとつのエピソードとして終るのである。（もちろん、単にそれだけではない。この一件の源氏に残した傷は、たとえば近くは末摘花の巻におけるように、この後の展開のひとつのエネルギーとなる。）

作者はむしろ、変化めく虚構を通じて、夕顔の悲劇にひたったということができよう。「ひたぶるに従ふ心」をもった夕顔の悲劇である。そのためには、あのような観念操作が必要だったのであり、源氏を通して夕顔を形象することでそれを果したのであった。源氏へのあこがれという点では、作者紫式部も同じであり、源氏への密着は、むしろそのことの実現のためであった。

しかし、夕顔の巻の最後にみられる「あまり、ものいひさがなき罪、さりどころなく」というような、ごく客観的なみせかけを一方もっている。これを、物語の展開のなかからみると、あれはてたなにがしの院での源氏と夕顔の契りを、「ゆく先の御たのめ、いと、こちたし」と評しているし、病のいえた源氏が、軒葉の荻に歌をおくるとき、「御心おごりぞ、あいなかりける」と評している。このように、とつぜん作者が顔をだして、大げさです、とか、困ったものだ、とかと源氏の行為を評する奇妙な現象がある。それは、空蟬によって客観化された現実の状況が、夕顔の巻の変化めく虚構を通して逆に作者によみがえってくることにほかならない。空蟬の状況から、観念的に夕顔をうみ出し、そのなかにひたりながらも、作者はやはり現実とそれを対比せねばならなかったのである。このことは、源氏へのあこがれが、逆に現実をてらしだして行くということではなかろうか。夕顔の巻における作者の観念操作は、源氏へのあこがれからでてきたものと思うからである。そして、客観的な態度を帚木の最初と夕顔の最後によそおいながら、自己の情熱の記録を紫式部は虚構の虚構のなかに構成したのであった。それは、相対的・客観的に現実を見るよりほかに、正しい現実認識が彼女にとってはなかったから、そうするほかに方法もまたなかったのであろう。

（日本文学科四年）